

水はめぐる

沖縄県

豊見城市立豊見城中学校 三年 糸満 愛莉

ああ、おいしい。体育の授業が終わると、急いで水筒を手に取り、ぐくりと水を飲む。毎日私たちを支えている水は、どのような道を辿ってやってくるのだろうか。私は水について考えてみた。

母が小学生の頃は時々、断水する日々があったと聞いて私は驚いた。蛇口をひねっても水が出てこない日があるなんて、想像しただけでも不便で心細い感じがする。雨が少ない年、その頃の沖縄ではダム貯水量が県民の需要に追いつかず、渴水をまねくこともあったそうだ。断水が始まると、お風呂や洗濯は貯めていた水を少しづつ大切に使っていた。沖縄県では年間を通して降水量は二千ミリと多めだが、長い河川がない。そのため、ダムができ、安定して水を供給できるようになるまで、各家庭の屋上には水タンクが設置されていた。それらは人々の命を支えていたのだ。

水の循環のスタートは雨だ。陸地に降った雨は池に貯まったり、地下にしみこんだり、海に流れ出るなどしていくつもの道の流れていく。沖縄本島北部に残る豊かなやんばるの森の川や土の中に時間をかけて蓄えられた水は、そこで生きる生物たちの命をつなぎ、生態系の維持を支えている。また、沖縄本島中南部や宮古島などの琉球石灰岩と不透水性基盤の隙間から水が湧き出るところを「カー」といい、貴重な水資源として昔から人々に大切に利用されていたこともわかった。

「カーの水を汲みにいく。それが子供の頃の大切な仕事だったんだよ。」と祖母は行った。私は改めて、蛇口をひねればきれいな水が出てくる今がどれほど恵まれているのか実感した。貴重な水資源のある場所は、同時に人々の信仰の対象となつて、ほとんど拝所が設けられている。祖母の暮らした時代は水の尊さを今の私たちよりも強く感じていたんだと知った。

私たち人間が様々な用途で利用した水はその後、川や海へ流れ出て太

陽の熱で蒸発する。それらは雲をつくって雨を降らせ、再び私たちの住む地上へ帰ってくる。今から約二千三百年前、世界で初めて水道がつくられて、人々の生活はしだいに豊かになっていった。作物を育てる、洗濯をする、お風呂に入る、水を飲む。私たちの暮らしに水があるのは、当たり前なことではない。水質汚染や洪水、水不足、そして水をめぐる紛争。今、世界は多くの問題を抱えている。しかし、私たちが生きていくためには水が必要だ。「武器ではなく、命の水を」と遠くアフガニスタンの地で活動し、凶弾にたおれた中村哲医師の言葉が私の頭を駆け巡った。

水について考えてみて私は、生活の中で水を利用することは、多くの道を辿ってここへたどり着き、自然へ戻っていくという流れの一部であり、通り道であると知った。そして、窓の外で降っている雨水がこれくらいいくつもの道をめぐることが想像すると、それらを守るためにわたしたちができることはたくさんあるように感じた。同時に、自然の水のめぐりを私たちが汚し、壊すことは絶対にしたくないと強く思った。